

社会的課題・教育的課題・政治的課題 ～2019年教育講演会報告～

2月23日(土)、定期総会の午後、今年も教育講演会を開催した。今回のEd.ベンだよりでは、その報告と感想をまとめてみた。講師はシンガーソングライターの寺尾紗穂さん。著書に「原発労働」(講談社現代新書)などがある。そして演題が「原発労働と私たち・・・そして教育」。また、サブタイトルを「知るべきこと!伝えるべきこと!」とした。

今回の講演の意義

ずいぶんと近頃は物事が言いづらくなってきたとよく言われる。日本社会全体の風潮のようで、ある物言いに対して、発言したこと自体への攻撃が公然となされる。最近では、とある人気モデルが辺野古の選挙に触れる小さな発言をただけで、それは大きく報道され、倫理的に大きく外れたことをしたかのようにネットでは攻撃された。当然個々の考えや思いは自由のはずだが、それを声高に叫ぶのは、どうも遠慮しなければいけないような雰囲気である。(一方で、ヘイトスピーチや嫌韓本などは大手を振っていることも事実だ。)

教育の学校現場でも物事を正面から考えようとすることはとみに難しくなった。政治的中立性を否定するものではまったくないが、過度な自己規制が、実は教育の根幹の一つである「批判力」や「問題・課題の正統的な検証力」の喪失につながってしまっているのではないかと心配するのである。まして、様々な角度からの真実は、「知ることの意味」と深くつながっており、「提供された一つの真実」ほど疑わしいものはないし、また、「提供された一つの真実」こそが教育の中立性を損なうものであることは、歴史が明らかにしている。

昨年度の教育講演会では「憲法」を取り上げ、今年は「原発労働者」を取り上げた。この二つのテーマは、その意味では、「話題にしづらい」テーマを敢えて連続で取り上げたことになる。もちろん、憲法をテーマに取り上げたからと言って「憲法改正反対」運動を繰り広げるつもりもないし、原発反対の署名を集めるつもりでもない。(#「原発反対」の立場は団体としては表明しています。)

問題は、現代社会においてこれだけ重要な社会的な課題を、なぜ教育では取り上げることができないのかということである。繰り返す。これだけ重要な社会的課題なのに・・・である。そこには一つのメカニズムが存在しているように思う。

現在の社会では、社会的な課題としての議論は成立せず、**社会的課題は政治的課題として吸収されてしまっている**のではないだろうか。そしてそのことは「賛成か反対か」、「推進か否か」といった単純な二元論に陥りやすい。教育はこの政治的課題から中立であろうとして、社会的課題を教育の内側に取り込むことをやめてきたのである。その結果、教育はその時々々の社会との関わりのない、無色透明なものとなっているのである。

しかし、人間が社会的な存在である以上、社会的な課題を意識したり、向き合ったりする経験なしで大人へとになっていくことの不自然さに、いったいそれが責任を持つのだろうか。現在の多くの社会的課題



は、その解決を今の子どもたちに委ねなければならないものが多い。原発を含むエネルギーや地球温暖化の問題など、待ったなしの状況で、それでも私たちは子どもたちに問題を伝える切り口すら持っていないのが現状である。

寺尾紗穂さんの切り口

原発労働者を語る時、寺尾紗穂さんの視点は明確であった。それは、あくまでも原発労働に従事する労働者その個人を丁寧に理解していくことであった。彼女が原発労働を課題とする中で出会った人一人ひとりをきちっと取り上げ、その人の背景や考え方、そして従事してきた原発労働の実相を正確に描き出していく。決してその人達をひとくくりにはしない。それぞれの存在がしっかりとそこに置かれていくような気さえた。そして一人ひとりの存在に寄り添おうとするからこそ、原発労働の過酷さや非人間性がくっきりと浮かび上がってくる。

そして私たちは気づく。これは原発現場の特殊性ではなく、同じ構造がこの社会の中にはいたる所にあることに・・・。

寺尾紗穂さんは、原発労働者だけでなく、都会の建築現場で働く年配者や、近くの駅で見かける路上生活者にも声をかけていく。そこに「居る」人の尊厳を受け取りつつ、思わずつぶやく。「私たちの社会はこんなにもひどいのか」・・・と。

私たちが様々な問題に触れる時、戒めなければならないのが「わかったつもり」、という善良さである。知識として理解はしても、体験的にはわかるものではない。そうしたとき、そこに生きる人をそのまま受け取ろうとする寺尾さんの姿勢に、いままでにない新鮮さと、教育においてとべき手法の手がかりをもらえたような気がした。たしかに、私たちには、当事者の感じていることや思いそのものを感じ取れなかったとしても、一緒に生きられる社会をつくることは可能なのだ。

最近、東京電力が福島第一原発の廃炉作業に、新しい就労の形である「特定技能資格」の外国人を受け入れることは可能であるという説明を下請けに説明していたことが問題となっている。原発労働と外国人！ここにも「こんなにもひどい社会」が生まれようとしている。

寺尾紗穂さんの歌

寺尾さんはシンガーソングライターである。講演の後半はピアノを弾きながら歌ってくれた。寺尾さんの歌に出てくる人間はみな前向きに生を生きようとする。例えそれが社会の底辺であったとしても、つらいことが日々襲いかかったとしても、それでもがんばって生きようとする姿が浮かび上がってくる。そこに寺尾さんの人へのまなざしの原点を感じた。

講演後、モデレーター松田洋介さんを交えてのパネルディスカッションで3名の小中学校の先生が登場した。働くことの意義を教えることの難しさ、教員間で課題を共有することの困難さ、あまり「きわどい」課題を扱いたくないとする同僚達の本音・・・。それでもそれぞれの職場で、課題意識を持って子どもたちと一緒に考えようとする姿勢と、寺尾さんの歌に現れた人へのまなざしがなぜか重なるようで、先生方にエールを送りたくなった。

6・7・8月のEd.ベンチャーの学習会

理論学習会 ●6月23日(日)講演「SSWの視点から考える学びの環境づくり～組織的な取り組みの可能性～」講師:上原樹氏(大和市青少年相談室SSW)※パパママのための学習会と共催 ●7月1日(月)授業案検討会「題材から授業をつくる」講師:馬場有希氏(小学校教員)※授業研究会との共催

授業研究会 ●6月18日(火)実践報告「学級会」講師:内藤順子氏(元小学校教員) ●8月27日(火)実践報告「算数・数学」講師:加藤綾氏(中学校教員)

外国人の子ども理解のための学習会 ●8月21(水)～22日(木)集中講座全8コマ

※時間・場所等の詳細はHPをご覧ください。

理事のつぶやき 個人情報保護条例が制定されて以来漏えいが起きないように細心の注意を払ってきた。だが、どうだろう。今はネットなどを通じて私たちの情報は、丸裸状態だそうだ。それを悪用して選挙の動向を揺るがした大事件も起きた。巨大ネットワークは、世界で飛び回り、個人の嗜好や性格などが分析され、お金儲けのために売られているという。お互いの顔が見える関係の中で安心して暮らしたいものだ。(N.J)